第59回 タナゴ

今回は、コイ科タナゴ亜科の淡水魚の総称としての「タナゴ」を取り上げます。

一見してフナによく似ていますが、よく見るとフナよりは臀鰭が広く、体も平べったく華奢な感じがします。鱗がたいへん美しく、特にオスは婚姻色が鮮やかです。特徴的な生態として、長い産卵管で淡水生の大型二枚貝類の殻内に産卵すること、孵化した仔魚がしばらく二枚貝の体内で生活することが挙げられます。

もともとタナゴは「たびら」といい、「田の平たい魚」という意味です。湖沼や河川などの広い水域だけでなく、田んぼの水路やため池にも生息しています。身近な魚として釣の対象魚ともなっています。一方で、江戸時代は上流階級の趣味とされ、現在も高価な釣り竿も使われることも少なくなく、タナゴ釣りは高級な趣味としても知られています。しかし、多くの人にとっては、釣りよりもたも網で捕獲することが多い魚です。昔は網で捕獲して佃煮などにして食べられていたようです。現在では食用としては、ほぼ使われていません。

姿の美しさから鑑賞魚としても、よく飼育されています。小さく飼いやすい割に見栄えが良いことから、初心者にも好まれます。同時に、希少な種も多く、地域で保護活動が盛んな魚種の１つです。いろいろな意味で人との関係の深い魚です。

日本には、タナゴ亜科が3属18種生息していますが、河北潟ではタイリクバラタナゴ、ヤリタナゴ、ミナミアカヒレタビラ、イチモンジタナゴの4種が確認されています。

タイリクバラタナゴは中国大陸原産の外来種ですが、河北潟では一番多くいるタナゴです。体高が高く平べったい魚です。オスの婚姻色はバラ色に例えられますが、虹色の複雑な光沢があり、たいへん見栄えのする魚です。

ヤリタナゴは、やや大きめのタナゴで、体型はややずんぐりでしっかりした感じがします。オスの婚姻色は鮮やかですが、すこしどぎつい感じがします。河北潟本湖からは確認されず、河北潟につながる水路から見つかっています。目立つ口ひげがあります。

ミナミアカヒレタビラは、最近になってから河北潟で生息していることが分かった魚で、生息数は多くありません。あまり平べったくない種で、オスの臀鰭の婚姻色が目立ちます。

イチモンジタナゴは、90年代には確認されていましたが、その後河北潟からは消滅してしまったようです。もともと琵琶湖・淀川水系に生息する種で、河北潟では国内移入種となります。個人的には、とてもスマートでエレガントなタナゴで、いなくなってしまったことはすこし残念です。（文：高橋　久）